



# 思齊のしせい

大阪府立思齊支援学校 支援室だより  
第56号 令和4年6月13日

昨年度は「愛着障害」をテーマに、愛情の器モデルや支援方法について紹介しましたが、今年度も「愛着障害」をテーマに少しお話しできればと思います。今回は「愛着の問題を抱える子どもの対応が可能なクラスづくり」、次回は「愛着の問題を抱える子どもの保護者への支援」について紹介します。日々のクラス運営のヒントとなるものがあれば幸いです！（担当：支援室 竹内千恵）

## 【平等な対応ではなく公平な対応を】

愛着の問題を抱える子どもへの特別な対応をお願いすると「他の子どもたちの担任でもある私がその子にだけ特別なことをするわけにはいきません。」という答えが返ってきます。ここで大切なのは「平等な対応」は公平ではないということを理解することです。子どもたちの多様化を踏まえれば、それぞれの子どもに合った対応をすることが真の「公平な対応」なのです。その子その子に違ったかわりをし、「一対一」の信頼関係を築いていくことがクラスづくりにおいて必要なことであり、いきなり「一対多」で関係づくりはできません。

## 【一人ひとりが「私は特別！」と思えるように】

子どもたちの好きな物、好きなことを把握した上で一人ひとりに「Aちゃんは動物が好きだね。」「Bくんは計算が得意だね。」と、その子が嬉しいと感じる言葉をかけます。その中で「先生は計算が苦手なAちゃんを算数の時間に何度もあてたり、動物が嫌いなBくんにお世話係を頼んだりはしません。みんなは一人ひとり違うので、違う言葉をかけています。」と、投げかけておきます。どの子も「特別な



子」であり「特別な扱い」を受けていると実感できるクラスをつくることで、愛着の問題を抱える子どもに特別な対応をしても「あの子だけずるい！」といった意見は出ずに、お互いを認めるクラスになっていきます。

## 【授業の形態を工夫して「一対一」の時間を確保】

子どもたちとの「一対一」の時間を確保するためには、授業の構造化の工夫も必要です。全ての時間を全体授業にしてしまうと個別のかかわりをする時間がとれず、愛着の問題を抱える子どもに対して「先手の個別支援」ができなくなってしまいます。そこで有効なのが授業を「全体授業」「個別作業」「ペア学習」とグループ学習」の3つに区分する構造化です。「個別作業」の時間があれば、個別の指示や支援が可能になり、「ペア学習」では、サブの教員の力を借り、愛着の問題を抱える子どもとかかわってもらうことでアピール行動を低下させることが可能になります。「ペア学習」が軌道にのった段階で「グループ学習」を導入し、小集団での行動ができるよう支援します。



## 【愛着の問題を抱える子どもが複数いる場合には…】

愛着の問題を抱える子どもがクラスに複数在籍している場合、クラス開きの方法を間違えると、あっという間に子どもに主導権を奪われ、クラスが混乱状態になります。つまりクラス開きの準備が重要なのです。事前に情報を集めておくのはもちろんのこと、それぞれの子どもの「不適切な行動」「適切な行動をしやすい状況・条件」を整理しておくことが重要です。そうした準備ができたあと、クラス開きの際にわかりやすいルール（してはいけないこととしてほしいこと）を明確に提示するのです。また、どのタイミングで誰と一対一になるのか、支援の順番を想定しておくことも大切です。「この子は先に支援しないといけないか。」「この子はあとでフォローしても大丈夫か。」等のタイミング意識がクラスづくりには重要です。

参考文献：米澤好史『やさしくわかる！愛着障害』ほんの森出版,2018.

（上記の文献を参考に作成した文章のため「障害」の文字を使用しています。）

